

生出学区連合町内会

おいでもんのまちづくり



「太白山(おどやま)さ行ってみっぺ」で太白山までの送迎車に貼った、「おいでもんステッカー」

生出地区の特色

全国的に有名になった凧揚げイベント「フライハイおいで」、秋の風物詩である「生出コミュニティまつり」など、地域に根差したイベントを企画し地域を活性化してきた生出地区。生出学区連合町内会やPTA、学校、地区社会福祉協議会など幅広いメンバーで構成する「生出市民センター運営協力委員会」がこれらの運営主体となり、他にもかかしにより交通安全を啓発する「生出かかしまつり・コンテスト」や子育て中の親が気軽に交流できる場として連合町内会、地区社協、区役所、市民センター各種団体共催の「めんこいサロン」など、生出地区ならではの特色のある様々な活動を行っています。

例年、10月下旬の日曜日に開催する「生出コミュニティまつり」では、小学校を登校日にして、地域の将来を担う子どもたち全員が地域に溶け込み、ステージ出演などイベントを盛り上げるような工夫も行っています。

きっかけは身近な地域活動

生出地区では、平成26年度に連合町内会内に「生出まちづくり委員会」を結成し、将来のまちづくりのあり方や活性化について検討しています。

「まちづくり活動に参加するようになったきっかけは、交通安全協会、PTA、消防団等の様々な地域活動です。生まれ育った地元での活動であったため、すんなりと活動に入ることができました」と語るのは、委員長の沼田さんと副委員長の太田さん。

PTA活動は子どもが卒業してしまうと、一般的に関わりがなくなってしまうことが多いのですが、「小学生の体験学習指導等を通じて、子どもたちとのつながりができたり、地域と継続的に関わることができた」と沼田さんは語ります。



おいでもん
地域高校生ボランティアグループが考案したキャラクター。生出村の初代長尾村長をモデルとし、太白山をイメージした顔の形に、愛嬌のあるたれ目が印象的

特色のある
様々な活動を
行っています



生出コミュニティまつり 「坪沼祭囃子 保存会」のステージ発表

参加者が増える
大きな要因は
「地域への愛着」

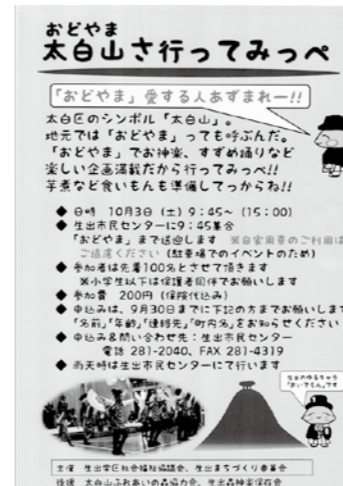
数々のイベント・地域活動

「フライハイおいで」は平成26年度より休止していますが、その後も数多くのイベントを企画・実行しています。交通量が多い国道286号線沿いに個性あふれるかかしを並べ、近年、ドライバーの注目を集めている「生出かかしまつり・コンテスト」は、秋の恒例のイベントとして定着してきました。交通安全を呼びかけるだけでなく、人気投票を行うことで、地域外の方々に地域への関心を高めるPR効果も狙っています。

平成27年10月、初の試みとして区のシンボルである太白山での地元芸能イベント「太白山(おどやま)さ行ってみっぺ」を開催しました。わずか3か月という短い準備期間ながら、130名を超える参加者が集まりました。

また、半年にわたり地元の農家から様々な野菜作りを習う「栽培型指導農園」事業は10年間で200人以上の地元坪沼ファンをつくりました。1期生を中心に結成した「菜援隊」のメンバーは、これまで培ったスキルを生かし産直市に出店するなど、様々な方法で地域の活性化に貢献しています。

案内のチラシを各世帯へ直接配布



地域愛が原動力

「イベントの準備を進めていくうちに、若者の定住に役立つ活動をしようと思いついた人が出てきた気がします」と、沼田さんは語ります。

様々なイベントに取り組むことで、地域が一体となり、一つのものと一緒に作り上げる達成感や、仲間作りなど、活動に関わることが楽しみとなり、次回もまた参加しようという意欲が湧ききっかけになっています。

また、参加者が増えている大きな要因は「地域への愛着につきます」と、太田さんは語ります。

小学校の学芸会で、旧生出村を日本の三大村と言われるまでに築き上げた長尾村長や秋保電鉄を紹介するなど、歴史を大事にし、地域愛を育む取り組みを継続して行っています。

活動を長く続けるコツは、「日頃からの小まめな声掛けで手伝ってくれる人と仲良くする。会議の時には腹を割って言いたいことをとにかく言い合う、ともに充実感が得られるような取り組みにすること」と、沼田さんは語りました。



生出かかしまつり・コンテストでは、工夫溢れる素敵なかかしが国道286号線沿いに勢ぞろい!

(取材・執筆 太白区まちづくり推進課)

加茂連合町内会

顔とかおをつなぐ 防災コミュニティの深化

加茂連合町内会の紹介

加茂連合町内会は泉区都心部に近く、北環状線を南北に挟んだ丘陵地域に住宅地がひろがり、南は水の森公園、北には七北田川が流れ、町のほぼ中心には、桜が美しい長命館公園があり、自然に恵まれた環境です。連合町内会の加入世帯は、平成27年現在で2,049世帯となっています。「連合町内会の役員数は20人と多く、9つの単位町内会・自治会長と9つの各種団体代表者から構成され、加茂団地が抱える課題などに町内会だけでなく各種団体の立場からも取り組んでいます。連合町内会役員の約半数が役員を複数年経験していて、毎年の行事進行や課題の解決に速やかに対応し、楽しく活動しチームワークも抜群です」と、連合町内会長の阿部さんは語ります。

加茂は避難所運営の先駆的役割

加茂地域では連合町内会から半ば独立し、専任の会長をトップとした「加茂防災協議会」が組織されており、東日本大震災前から「自分の身は自分たちで守れ」を基本方針にし、連合町内会の大規模な防災訓練のほかに、町内会毎の自主防災訓練を実施しています。震災直前の2月に仙台市内の町内会の避難所運営の先駆けとなる「避難所運営マニュアル」を作成しました。震災までにマニュアルを全戸に配布することは間に合いませんでしたが、関係者が共通の認識をもてたこと、避難者による活動班の編成ができたこと、避難所の運営ルールが細かく設定されていたことなどにより、運用がスムーズだったといえます。

楽しく活動し
チームワークも
抜群です



長命館公園桜祭のステージ



加茂小学校では、大焼き芋大会で遊びを取り入れた消火訓練を実施

さらなる防災への取り組み

平成27年に実施した19回目となる防災訓練では、子どもから高齢者の幅広い世代が参加し、マニュアルにそって確認し合いながら実施していました。震災の前月に作成したマニュアルを運用してきており、その後の防災訓練でマニュアルに磨きをかけてきました。より実践的になるよう様々な団体の方々と連携しながら、マニュアルを深化させることには余念がありません。また、顔見知りになるということが、どれだけ大切か震災で感じたといいます。「燃料や食料など協定がなくても、地元企業やボランティアが集い助け合うのは、日頃の地域コミュニティがしっかりしているからです」と訓練に参加した方は語ります。また、技術の継承もしっかりしており、仮設トイレの取付けについても、大人から習った中学生が基本を大切に真剣に組み立てていました。炊き出しでは、ボランティアが時折笑顔を見せながら手際よくおにぎりを握っていきます。そこには温かさがあり、現実の災害でも避難してきた方々が安らぎを感じるのではないのでしょうか。



加茂地域総合防災訓練における中学生の仮設トイレ設営

今後の展望について 連合町内会長に伺いました

「団地が抱える様々な課題は、町内会・自治会単独では解決できないことはわかってきたので、連合町内会は各種団体との協力体制を築くことに重点を置いてきました」と連合町内会長の阿部さんは語ります。加茂団地が抱える最大の課題は、住民の高齢化であり、平成25年に高齢化対策準備会議を立ち上げ高齢化への取り組みを始めました。高齢化対策を考えるのは、団地の継続が重要であると捉えなおし、子育て支援、高齢者の健康づくり、町内会活動の見直しなどを考えていくために幅広く住民の参加を呼びかけるため、平成26年に「加茂まちづくり協議会」を結成しました。連合町内会も各種団体とともに参加し、東北学院大学とも協力しながら平成27年度から本格的に活動を始めています。

阿部さんは、「多くの皆さんが参加し、顔とかおをつなぐことにより横断的に組織が交流することが重要」と語ります。

これは、1+1が3にも4にもなっていくということで、加茂連合町内会の強みは、様々な世代の皆さんが日ごろから、顔を合わせて交流しているところだと感じました。



加茂地域総合防災訓練での要援護者対応訓練における世代間交流

(取材・執筆 泉区まちづくり推進課)

様々な世代が
顔を合わせて
交流